一般社団法人日本障害者カヌー協会　News Letter

パラマウント通信　mini

2024年1月　　パラカヌーサポーター編　　チャレスポ！TOKYO会場配布号

2021年10月パラカヌーサポーター講習会がスタート

2021年9月5日TOKYO2020パラリンピックが閉会。大会後にもっと多くの人に障がい者スポーツの重要性や、社会共生につながることを知ってもらう機会を創生したいと各競技の中央競技団体では考えていました。その機会の一つとして、当協会ではパラカヌーサポーターを育成する講習会の実施を計画。同年10月23日東京都江戸川区にて開講し、26名の一期生が誕生しました。講師を務めるのは、協会事務局長の上岡央子さん。講習会開講のきっかけと、3年間の講習会の傾向や効果、今後の活動目標について話を聞きました。

協会の存在価値と活動理念からの課題を抽出

日本障害者カヌー協会（以下「本会」という）の目的は、定款第3条にこのようにあります。『この法人は、日本における障害者のカヌーに関する統一組織として、スポーツとしてのカヌーの普及を目的とし、これを通して障害者の生活圏、行動圏を拡大していくことに寄与することを目的とする。』
日本のほとんどの地域が水に恵まれた環境にあり、カヌースポーツを楽しめる環境があります。しかし、パラカヌーの普及活動を実施する中で、ハード面とソフト面の整備に地域格差があり、様々な障壁がありました。私たちパラカヌーの全国統一組織としては、全国のパラカヌー環境や意識の地域格差をなくすための活動がパラカヌー普及のために最重要課題と考えました。講義は、本会の歴史、パラカヌー競技の歴史、障害の基本的な知識、サポートの考え方などを中心に、パラカヌーを通じて共生社会を一緒に考える課題を盛り込んだ座学とワークショップで構成されたカリキュラムになっています。そして、この講習会を開催した地域は、翌年に体験会を企画して受講生がサポーターとして活躍いただける機会を作り、数年後には地域レベルで自立したパラカヌー体験会の企画や運営ができるような地域に成長していくことを理想としています。このように、全国統一した環境作りをシステム化することで、パラカヌーができる環境や意識の地域格差をなくすだけでなく、地域の自然環境の特色を生かしたパラカヌーの体験会が生まれてくると考えています。

次年度の活動目標と、将来の姿

共生社会は、社会に生きる一人ひとりが行動し、皆で作るものだと考えています。私たちパラスポーツ団体は、スポーツを通じて共生社会に近づくための活動を、地域や行政機関、企業と共に創造することが役割です。この講習会は初年度3地域、2年目5地域、3年目6地域で開催しています。R6年度はすでに2地域からの依頼をいただいています。継続実施の地域もあれば新規実施の地域もありますが、次年度も5地域以上の開催を目標としています。10年後には、日本全国47都道府県でパラカヌーサポーターが生まれ、地域ならではの魅力が詰め込まれたパラカヌー体験会が全国各地で開催されてることを期待しています。

講習会開催初年度から、3年目の傾向と効果

初年度は、身近な地域で選手が活動する場所近郊でサポートを集めることを目的に開催したり、東京近郊の委託事業をお手伝いいただける人材を発掘することを目的として開催したりと、模索しながら開催場所を探して実施しました。 2年目からは、選手強化活動の活発化のおかげでパラカヌーの認知度向上が追い風となり、同じ課題意識を持った自治体や、健常団体の地域都道府県協会からの依頼が増えてきました。地域レベルで同じ課題意識を持っている自治体の担当者や健常団体の都道府県協会の方々と一緒に取り組むことによって、その地域の環境が大きく変わることが期待されます。そして、それは地域における『共生社会』への発展が加速されることにつながります。

パラカヌーに出会って

日本障害者カヌー協会　普及委員会
副委員長　石原　望

サポーター講習会では交通事故により障害者となった自分自身がどのようにパラカヌーと出会い、どう変わったかを当時の写真を添えてお話ししています。パラカヌー体験会で、車椅子でもサポーターの補助があればパラカヌーを楽しめる体験をした私は、これを機に「新しいことにチャレンジしてみたい」と沖縄、ハワイ一人旅やパラ大会出場などウォータースポーツにチャレンジしたエピソードを披露しています。それは自慢ではなく障害者が一歩踏み出すと世界が変わると伝えたいから。

ワークショップでは障害者目線からカヌーの移乗やフィッティングのリアルモデルとなってサポーターが障害者を安全にカヌーに乗せるスキルを学びます。最初は緊張気味の受講者がサポーター講習会修了証を笑顔で受け取る姿に毎回感動をおぼえます。私自身、身体的に失ったものは大きかったが、失ったもの以上に今まで体験したことのない充実した日々と笑顔の輪を広げる活動をこれからも継続したいと思います。

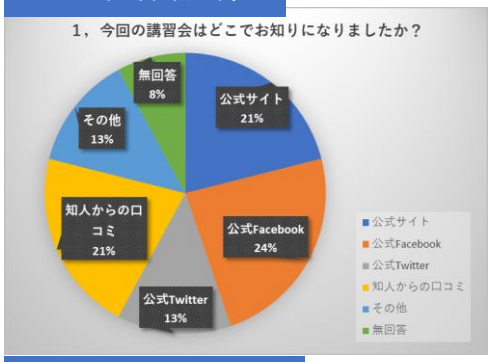
実習では自ら障がい者モデルとなる

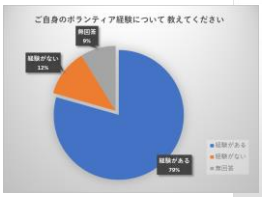
一般社団法人日本障害者カヌー協会　News Letter

2024年1月	パラマウント通信 mini	パラカヌーサポーター編

パラカヌーサポーターのアンケートから（抜粋）

2021年（令和3年）

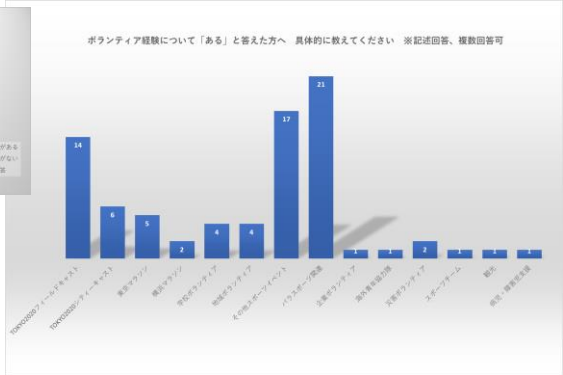




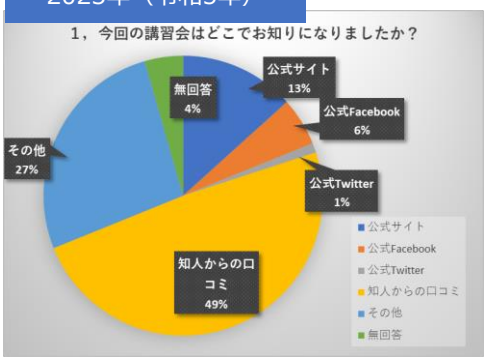
令和3年受講生

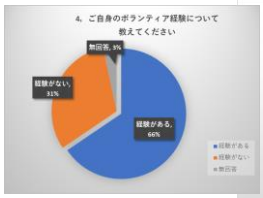
東京都江戸川区　26名
茨城県かすみがうら市　9名

計35名



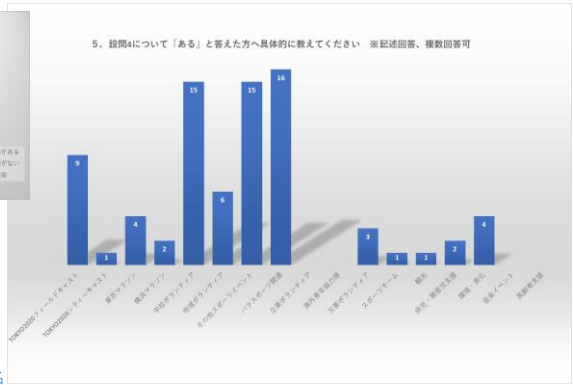
2023年（令和5年）





令和5年受講生
京都府京丹後市　20名
北海道滝川市　9名
石川県小松市　9名
東京都江戸川区　21名
※再受講5名含む
大阪府高石市　9名
鹿児島県伊佐市　22名

計90名



パラカヌーサポーター講習会修了生は3年間で169人

初年度（令和3年）はTOKYO2020オリンピックパラリンピックの流れから、オリパラに関わったボランティア経験者が多く見られた。また講習会開講情報について、協会のSNSから得た人も多いのも特徴である。3年目の令和5年度は、ボランティア未経験者または学校や地域に根付いたボランティア経験者が多く、開講地の地域性もあるのか、知人からの口コミが多いのが特徴。令和5年度からはサポーターの再受講制度も開始。日々変遷する障がい者を取り巻く環境の変化や、サポート法のブラッシュアップ、新規受講者とのコミュニケーションなどを通じ、サポートの専門性向上や継続活動を図っている。再受講の受講料は無料。

選手として・サポーターとして

日本障害者カヌー協会　次世代育成選手
普及委員会　副委員長　　朝日　省一

私は 2017年4月に交通事故で車椅子生活になりました。1年の入院をへて 日常生活に戻った時に パラカヌー体験会を紹介してもらい参加しました。初めは カヌーになんて乗れるのか 半信半疑だったのですが、サポーターの方々が一生懸命に自分に合ったフィッティングを考えてくれて カヌーに乗ることが出来ました。今では 選手として 活動出来ていますが、カヌーに乗るきっかけや 楽しさを教えてくれた事を今でも 感謝しています。自分たちの様な 障害を持っていても1歩 踏み出せば 何でも出来る。そんな事を手伝える サポーターを今後もやっていき広めて 増やしていければと思います。

講習会や体験会の時は
レクリエーション艇

競技者としては
ヴァー艇に乗っています

パラカヌーについて知りたい人　パラスポーツのサポートに興味がある人　ボランティアの一歩を踏み出してみたい人
一緒に社会共生のアイデアを考えてみませんか？

講習会のスケジュール（例）

10時ごろ講習会スタート
午前：座学
・障害特性について概要
・パラカヌー競技の対象障害について
・ワークショップの説明と準備
（昼食・着替え）
午後：ワークショップ
※グループワークを中心に
・車椅子などから艇への移乗サポート方法
・フィッティング、
・体験乗艇
カヌーDEクリーンアップ
15：30ごろ　終了

会場や天候により講義内容に変更の場合あり

一般社団法人**日本障害者カヌー協会**
〒107-0052　東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル4F
https://www.Japan-paracha.org/

Daiwa Living　Glosel　※協賛企業募集中！！